

# 社会的距離と逆社会的距離の分析枠組みに関する研究

—民族関係論における当事者意識に関する量的研究に向けて—

伊藤史朗

## The Analytical Framework of Social Distance and Reverse Social Distance : For the Quantitative Research on the Attitude of Migrants toward the Host Society in the Field of Ethnic Relations.

**要旨：**本論文は、移住当事者のホスト社会への社会的距離を研究するための分析枠組みを明らかにするとともに、分析ツールとして盛んに用いられている社会的距離尺度の有用性について検討する。まず、筆者が逆社会的距離尺度 (Reverse Social Distance Scale) の必要性を感じる出発点となった調査、すなわち、フィリピン・マニラで行った「マニラ在住の日本人によって知覚されるフィリピン人への社会的距離に関する調査」(Ito & Varona, 2009) を、「移住当事者によって知覚されるホスト社会への態度」に関する研究の出発点として取り上げる。社会的距離尺度を用いマニラ在住の日本人に対し、横断的調査を行ったものである。社会経済的データ、滞在期間、年齢、日本の伝統への固執、パーソナルネットワークの範囲が社会的距離の度合いとの相関を示した。次に、社会的距離を分析する枠組みについて検討し、最後に、社会的距離尺度の限界を示すとともに、その限界を補完する逆社会的距離尺度が移住当事者のマイノリティの視点の分析に有効であることを述べる。

**キーワード：**社会的距離、逆社会的距離 (Reverse Social Distance)、フィリピン

### 1. 問題の所在

本論文は、移住当事者のホスト社会への社会的距離を研究するための分析枠組みを明らかにするとともに、分析ツールとして盛んに用いられている社会的距離尺度の有用性について検討する。また、社会的距離尺度を補完する、逆社会的距離尺度の必要性についても述べる。グローバル化が呼び起こした注目すべき現象は、大規模で顕著な「人の移動」である。グローバル化が起こる以前は、複数の文化が接触する機会は今日ほど存在せず、多文化共生の可能性の追求もそれほど必要とされていなかった。しかし、異なる民族・文化・宗教の遭遇が日常的に起こる現在、文化的背景を異にする人々、いわば異なる思考形態を持った人々といかに「共生」を試みるかが問題となってくる。

このような背景から、特に本稿と同じ量的研究に目を向けると、日本の社会学の分野においては移住者 (migrants) に対するホスト社会の態度を「受容性」「寛容性」「排他性」の観点から分析する量的研究がなされている。

例えば松本 (2004) は、「外国人に対する地域社会の寛容度」という定量分析を行った。それによれば、都市度が高く、外国人との接触頻度が高い地域においては寛容度が高くなる。また、集住する外国人のタイプの違いから寛容度に差異が生じるとし、エスニシティの属性階層化の可能性を松本は指摘している。

田辺 (2002) は、パーソナルネットワークの観点から、外国人への排他性という社会意識の形成に際してパ

ーソナルネットワークが少なからず影響を与えているとしている。さらに、向井 (2007) は、自尊心と外国人への受容性との相関から分析を行い、日本においては自尊心の低い人ほど外国人への抵抗感を持つ傾向が強いことが示された。存在脅威管理理論と呼ばれるこうした研究は、異文化への態度を説明するモデルとして用いられている。

この他にも、ホスト社会からマイノリティへの態度を定量的に扱っている研究はいくつかある (伊藤、2000; 堀内、2006; 大槻、2006; 安達、2008; 小池・酒井、2010; 岩男、1989; 永吉、2008; 濱田、2008; 松本、2006)。

このように、マジョリティによって知覚されるマイノリティに対する態度を扱った研究は存在するが、その逆の移住当事者によって知覚されるホスト社会への態度を扱う定量的研究はそれほど多くない (王、2009)。

では、移住当事者によって知覚されるホスト社会への態度を明らかにするには、どのようなアプローチを採るべきなのか。本論文では、社会的距離の概念を用い、まず筆者が逆社会的距離尺度 (Reverse Social Distance Scale) の必要性を感じる出発点となった調査、すなわち、フィリピン・マニラで行った「マニラ在住の日本人によって知覚されるフィリピン人への社会的距離に関する調査」(Ito & Varona, 2009) を、「移住当事者によって知覚されるホスト社会への態度」に関する研究の出発点として取り上げる。そして次に、改めて社会的距離を分析する枠組みについて検討し、最後に社会的距離尺度の限界と、その限界を補完するであろう「逆社会的距離

尺度」が移住当事者のマイノリティの視点の分析に有効であることを示したい。

## 2. マニラ在住日本人によって知覚されるフィリピン人への社会的距離

移住者によるホスト社会への社会的距離に関する研究はどのように行われてきたか。ここでは、筆者の研究 (Ito & Varona, 2009) を要約して紹介する。

### 2.1 問題の背景

外務省によれば、在比日本人数は増加傾向にある。2008年の時点で1万4424人が在比日本人として登録されており、そのうち2879名が永住者である。滞在の理由は様々だが、学生、企業関係者、政府関係者、退職者、主婦ら大多数の者がマニラ首都圏周辺に居住している。そのため、本研究では調査地をマニラ首都圏に限定し、フィリピン在住の日本人が増加している現実を受けた、以下のリサーチ・クエスチョンを明らかにしていきたい。(1) マニラ在住日本人によって知覚される、ホスト社会構成員のフィリピン人に対する社会的親密さの度合いはいかなるものか。(2) 社会的親密さに影響を与えている要因は何か。(3) 他国籍の人々との間に知覚される親密さと比較して、日本人がフィリピン人に対して感じる社会的距離はいかなるものか。

現在、日本人とフィリピン人との間に、1920年代のアメリカのような強度の人種的緊張は存在していないかもしれない。事実、日比間のつながりは強くなっている。貿易と文化交流は拡大しており、在比日本人数が増加し、在日フィリピン人数も同時に増えている (厚生省大臣官房統計情報部, 1997)。両国は二国間の強力な貿易・投資リンクを発展させてきたとはいえ、日本はフィリピンにとって第二の貿易相手国、また、日本にとっても、フィリピンは14番目の貿易相手国である。フィリピンから日本への投資は他国と比較すれば少ないものの、日本はフィリピンへの最大の投資国である。

一方、フィリピンに居住する日本人が増加するにつれ、犯罪の標的になる例も目立ってきている。この事実はフィリピンに滞在する日本人個人個人の社会的距離に影響を与えるかもしれない。しかし、移住者の増加、貿易関係の強化、そして安全問題があるにもかかわらず、日比二国間の人々の社会的親密さについては現在のところほとんど分析がなされていない。本研究はその現状に一石を投じるため、ボガードスによって考案されその後修正された社会的距離尺度を適用した、マニラ在住の日本

人によって知覚される社会的親密さに関する初期的分析の提供を目的とする。

### 2.2 社会的距離概念の定義をめぐって

ロバート・パークは1924年の論文『社会的距離の概念 (The Concept of Social Distance)』において、社会的距離を「空間的距離よりもむしろ人間の感情に適用される距離」と定義している (Owen, Eisner & McFaul, 1981)。パークの研究意図は、「社会的距離」にかかわる人間関係の特徴づける「親密さ」を計測可能なものにするににあった。パークは「他人に対して、親密さや距離について自分の感情を表現するのは人々の日常的行為だ」と述べている (Owen, Eisner & McFaul, 1981)。

社会的距離の統計分析は、1926年にボガードスが行った教員、大学院生、学部生から構成される100のサンプルに対する試みを起源とする (Bogardus, 1933)。そこでボガードスは、社会的距離を「二者間もしくは個人と人種、職業、宗教のような集団間に存在する共感的理解の度合い」と定義し (Owen, Eisner & McFaul, 1981)、さらに『社会思想の歴史 (A History of Social Thought)』において「1926年の研究はアメリカにおける人種間の緊張を反映していた」と述べている (Owen, Eisner & McFaul, 1981)。

エスニック・アイデンティティが社会的距離に影響を与える主要因であるとされるが、それらの調査は、人種以外の要因が社会的距離に重大な影響を与える可能性にも触れている (Kleg & Yamamoto, 1998)。例えば、D. S. クリスタル、H. ワタナベ、C. ウー、K. ウェインフルト (1988) は、白人のアメリカ人学生が異なるエスニック・バックグラウンドを持つ人々に対して親密さを感じる要因として「年齢」があることを明らかにしている (Crystal, Watanabe & Weinfurt, 1988)。つまり、年齢差が大きくなるとともに、認識される社会的距離も拡大するのである。しかしながら、上述の研究者らは、アメリカに居住するアジア人学生にも同様の態度の変化があるとは認めなかった。また、アジア諸国においては、「年齢」の影響についての先行研究がそもそも少ない。それゆえ筆者は、「年齢」を変数として分析に加える必要があると考える。

ボガードス (1958) は、異なる国籍を持つ移民たちにアメリカ人が抱く社会的親密さの認識に関して、1945年に実施された縦断的調査研究の結果を呈示した。それは回答者の10%をアフリカ系アメリカ人が占めるといふ、アメリカにおける実際の人口割合を反映したもので、ヨ

ヨーロッパ系（ドイツ人、ロシア人、イタリア人、チェコスロバキア人）、アジア系（日本人、フィリピン人、中国人）、ユダヤ系、そしてメキシコからの移民に対するアメリカ人の態度が調査対象となった。その流れをくむ本研究でも、同様の比較を行うため、マニラ在住の他の国籍の人々に対する日本人の態度を分析に含めている。質問紙票に含めた国籍は中国人、韓国人、アメリカ人、イタリア人、エチオピア人、メキシコ人、フランス人、ロシア人、モロッコ人である。

本研究では、他者に対する親密さの知覚に影響を与えるであろう「日本人の背景にある特徴」を調査に組み込んだ。それらは、上述した調査に基づくものであるが、森岡（2000）によって特定されたパーソナル・ソーシャル要因の文化的変数も参考にしており、その変数とはすなわち、「個人の社会行動を統制する日本文化への固執」「フィリピンで主に使用される言語である英語とフィリピン語の能力」「フィリピン滞在の期間」（親密性＝familiarityを反映する）、そして「海外滞在の経験」である。また、フィリピンに住む他の国籍の人々と、日本人、フィリピン人それぞれの関係に影響を与えるパーソナルネットワーク、さらに社会・人口学的変数も、その他の要因として考慮した。

社会的距離尺度を用いた研究の大部分は西欧諸国でなされている。その大多数は移民に対するホスト国のマジョリティの人々の見方に焦点を当てており、その逆は少ない。したがって、アジアにおけるエスニック・リレーションの分析に社会的距離尺度を適用することは、我々に示唆を与えるであろう。本研究は他国籍を持つ人々から見た日本人との関係について経験的データを提供し、増大する日本とフィリピンの関係について全般的な理解を得ることを目的とするが、特に意図する目的は以下のとおりである。（1）マニラ在住日本人移住者の社会的距離の特徴を理解する。（2）ホスト社会への社会的距離認知に関する最も密接な相関関係を特定する。（3）彼らが最も親密であると感じる国籍を特定し、その結果に関する説明を加える。

## 2.3 フィリピンにおける日本人の社会的距離研究の具体的な方法論

### 2.3.1 本調査が対象とする日本人とデータ収集について

フィリピン北部では1万3738名の日本人が在留届を出しており、主な居住地はイロコス（リージョン1）、カガヤンバリー（リージョン2）、セントラルルソン（リージョン3）、カラバルソン（Calabarzon／リージョン

4）、ミマラパ（Mimaropa／リージョン5）、コーディネラ行政地区（CAR）、そして首都圏（NCR）地区である。また、この地域に住んでいる非永住者の日本人は、職業別に以下のような構成になっている。会社員（64%、約7000人）、その他（無職等／16%、1700人）、政府関係者（8.3%、約900人）、自営業（7.7%、約800人）、留学生・研究者（3.9%、約400人）、ジャーナリスト（0.4%、約40人）。本研究では、マニラに居住する日本人個人々人へのアクセスが困難であることを考慮して、日本人の会員を有する組織からサンプルを抽出した。対象となった74名は以下の組織に属している。ある大学の留学生用の寮（ $n=27$ ）、2つの宗教施設（それぞれ $n=13$ 、 $n=15$ ）、ある日本語の新聞社（ $n=5$ ）、その他（ $n=14$ ）。上記の組織の特性から、大半の被調査者は学生、主婦・主夫、会社員である。

### 2.3.2 測定における従属変数と独立変数について

#### 2.3.2.1 従属変数

従属変数は、社会的距離尺度によって測定される、日本人によって知覚されたフィリピン人と他国籍者に対する社会的距離の度合いである。他国籍者が本研究に組み込まれた理由は以下の2つである。（1）上述した先行研究との比較を行うため、（2）日本人の、ホスト社会構成員のマジョリティであるフィリピン人に対する態度と、他国籍者に対する態度との比較を可能にするため。また、ボガダスの研究デザイン（1933）と質問項目には、日本人の文化に合わせるため若干の修正を加えた。付与される社会的距離尺度のスコアは、回答者が回答したそれぞれの質問項目のトータル・スコアを反映している。肯定・否定の二者のみ回答可能な7つの設問があり、yesは0ポイント、noには1ポイントが付与される。ガットマン尺度に従い、設問は次のとおりに配列されている。

「あなたと以下の国籍の方の間に、次のような交流が生まれたとします。あなたはそれについて抵抗を感じますか。」（1）道端で話しかけられる。（2）一緒にレストランへ食事に行く。（3）あなたの家族と一緒に自宅でする。（4）ルームメートになる。（5）恋人になる。（6）あなたの家族の誰かと結婚をする。（7）あなたと結婚をする。

社会的距離尺度のスコアが最大の7点に近いほど、より親密な社会関係を示す。一方、スコアが低いほどより大きい社会的距離を示す。

### 2.3.2.2 独立変数

先行研究における社会的距離調査に含まれている独立変数は、ジェンダー、年齢、職業、教育、生活水準、平均支出などの社会・人口学的要因である。特に筆者の研究では、英語、フィリピン語の能力、フィリピンでの滞在期間、日本以外の国への滞在経験を加えた。さらに、8つの変数も付加しており、それらは親しい友人に関連する4つのパーソナルネットワーク要因と、日本の伝統的信念への固執の度合いを測定するための4つの質問である。

それぞれのカテゴリーに対応する問いは表1から表4を参照のこと。

## 2.4 統計分析と結果

### 2.4.1 回答者のプロフィール

社会関係を反映する変数に関し、表1では回答者の人口学的プロフィールを示している。総サンプルの平均年齢は34歳で（標準偏差＝15.4）で、範囲は、14歳から74歳である。回答者の64%が女性で、55.4%が一度も結婚していない。29名の既婚者のうち、21名（72.4%）が日本人の配偶者、7名（24.1%）がフィリピン人の配偶者を有している。大多数の回答者は高等教育を受けており、77%が比較的流暢な英語力（good command of the English language）を有しているが、フィリピン語ができると回答したのは、わずか24.4%であった。回答者の半数近くが学生（44.6%）で、次に主婦/主夫（23.0%）、専門職従事者（14.9%）と続く。月々の平均支出は、33.8%が2万ペソ以下で、18.9%が5万ペソ以上である。滞在期間については、32.4%がフィリピン滞在6か月未満、滞在3年以上が35.1%となり、残りの32.5%が、フィリピン滞在6か月から3年である。サンプルの中で47.3%が、日本国外に3年以上滞在した経験を持つ。

### 2.4.2 結果 社会的距離項目の度合いと平均値について（詳細は、巻末の表を参照）

表2は、日本人とフィリピン人の社会的距離のスコアを表している。63.5%がフィリピン人と路上で話すことに抵抗を感じない。67.6%がレストランで食事を一緒にすることに抵抗を感じない。74.3%がフィリピン人と自宅で食事をとることに抵抗を感じない。60.8%がフィリピン人のルームメイトを持つことに抵抗を感じない。フィリピン人のボーイフレンド・ガールフレンドを持つことについては、51.4%がその考えに抵抗を感じない。

国際結婚に関しても、50.0%が家族がフィリピン人と結婚することに抵抗を感じないとし、47.3%の回答者が自分自身がフィリピン人と結婚することに抵抗を感じないと回答した。

### 2.4.3 社会的距離の二項相関分析

表3は、回答者の人口学的変数とフィリピン人に対する社会的距離の二項相関について示している。「年齢」「婚姻」の有無、「言語能力」「職業」「月々の出費」「フィリピンと海外での滞在期間」「伝統信念の強さ」「近隣における親しい友人の存在」は、すべて直接的に社会的距離と関連していた。より年齢が若く、既婚で、なおかつ英語とフィリピン語の能力を持つ回答者が、フィリピン人に対してより近い関係を有す傾向がある。また、主婦・主夫は、フィリピン人に対し、社会的距離の度合いが小さい傾向がある。さらに、月々の支出がより少ない回答者、そして、フィリピンと日本以外の国への滞在がより短い回答者は、フィリピン人に対してより近い関係を持つ傾向がある。

パーソナルネットワークと伝統的信念を評価する質問については、近隣に親しい友人がいる者と、年老いた両親を世話することが大切であると信じる人が、フィリピン人に対してより近い社会的距離を持つ傾向が見られた。

表4は、マニラに居住する日本人によって社会的距離が近いと認知された国籍のランキングを示している。この国籍のランキングは74人の回答者の社会的距離スコアに依拠している。得点が7に近いほど社会的距離がより近いことを示している。

## 2.5 考察

### 2.5.1 社会的親密さの度合いに影響を与える要因

従属変数を含む初めの質問群への回答に表れた、際立った特徴に注目したい。初めの質問は個人の選択に関する項目である。3割以上の回答者がフィリピン人と話すこと、食事を一緒にとること、家を訪問されること、ルームメイトになることに対し、若干の抵抗があると回答した。一緒に食事をとるより、道端で話をするに対して若干抵抗感が高いという結果については、一緒に食事をする場合の相手が知り合いなのに対し、道端で話しかけられるという状況は相手が見知らぬ人である場合が多いので、それに対する抵抗であろうと考えられる。また、約50%の回答者が、フィリピン人をボーイフレンド、ガールフレンド、もしくは家族の一員、配偶者とす

表1 変数の記述統計

(n=74)

		n	%
年齢 (14-74)	Mean (S.D.)	34.0	(15.7)
性別	(1) 女性	47	63.5
婚姻	(0) 結婚経験無	41	55.4
	(0) 配偶者無 (離婚・死別)	3	4.1
	(1) 配偶者有	29	39.1
	日本人の配偶者	21	72.4
	フィリピン人の配偶者	7	24.2
	日本・フィリピン以外の国籍の配偶者	1	3.4
	N.A.	1	1.4
教育	(0) 小学校卒業	1	1.4
	(1) 中学校卒業	1	1.4
	(2) 高等学校卒業	28	37.7
	(3) 専門学校卒業	11	14.9
	(4) 大学卒業	29	39.2
	(5) 大学院卒業	4	5.4
言語能力 (英語)	(0) 全くわからない	2	2.7
	(1) 少し単語がわかる	15	20.3
	(2) 日常会話ができる	31	41.9
	(3) ニュースなどの話題を議論できる	22	29.7
	(4) ネイティブレベル	4	5.4
言語能力 (フィリピン語)	(0) 全くわからない	24	32.4
	(1) 少し単語がわかる	32	43.2
	(2) 日常会話ができる	12	16.2
	(3) ニュースなどの話題を議論できる	3	4.1
	(4) ネイティブレベル	3	4.1
職業	(0) 学生	33	44.6
	(1) 無職・定年退職	2	2.7
	(2) 主婦・主夫	17	22.9
	(3) 宗教家	3	4.1
	(4) 自営業	4	5.4
	(5) 専門職 (会社員、国際機関職員、政府関係者等)	12	16.2
	N.A.	3	4.1
1か月の平均支出 (ペソ)	(0) 9、999以下	9	12.2
	(1) 10、000-19、999	25	33.8
	(2) 20、000-29、999	10	13.5
	(3) 30、000-39、999	7	9.5
	(4) 40、000-49、999	2	2.6
	(5) 50、000以上	14	18.9
	N.A.	7	9.5
フィリピンにおける滞在期間	(0) < 6か月	24	32.4
	(1) 6か月<x<1年	7	9.5
	(2) 1年<x<1.5年	6	8.1
	(3) 1.5年<x<3.0年	9	12.1
	(4) <3.0年	35	47.3
ソーシャルネットワーク	(1) 親友がいる (yes)	70	94.6
	(2) 近隣に親友がいる (yes)	53	71.6
	(3) 日本人の親友がいる (yes)	67	90.5
	(4) フィリピン人の親友がいる (yes)	40	54.1
伝統的信念	(1) 妻は夫の家の墓に入るのがよい (同意)	39	52.7
	(2) 先祖伝来の家や土地は大切に守っていくのがよい (同意)	50	67.6
	(3) 年老いた親の面倒は家族がみるのがよい (同意)	67	90.6
	(4) 結婚せずに一人で暮らす生き方があってもよい (同意)	60	81.0

N.A.=no answer

ることについて抵抗があると回答した。これらの結果への説明は、家族からの社会的受容の観点から可能である。他のアジア諸国と同様に、日本人にとっても、「結婚」や「子供」に関する事柄は単なる個人の選択ではなく家族の事柄であると規定される（Fukuoka, 1998）。ゆえに、本研究における社会的距離スコアの低下は、人間関係が単なる個々人の選択ではなく、家族の影響に

よって決定されることを示唆する。その後の質問に対する否定的な回答の暫時的上昇も、関係が近づくにつれて文化的差異や言葉の壁が大きく立ちはだかるということ

表2 マニラ在住日本人のフィリピン人に対する社会的距離の度数 (n=74)

社会的距離尺度の質問（以下のことに抵抗を感じるか。）	n	%
1. 道端で話しかけられる	47	63.5
2. 一緒にレストランへ食事に行く	50	67.6
3. あなたの家族と一緒に自宅で食事をする	55	74.3
4. ルームメイトになる	45	60.8
5. 恋人になる	38	51.4
6. あなたの家族の誰かと結婚をする	37	50.0
7. あなたと結婚をする	35	47.3

n = 「いいえ」と答えた回答者の数'

表4 異なる国籍の人々に対してマニラ在住日本人によって知覚された社会的距離 (n=74)

	Rank	Mean score	S.D.	Median score
日本人	1	5.72	2.1	7.00
アメリカ人	2	4.34	2.5	5.00
韓国人	3	4.24	2.7	5.00
フィリピン人	4	4.15	2.3	5.00
フランス人	5	4.09	2.7	5.00
中国人	6	4.03	2.4	5.00
ロシア人	7	3.61	2.7	4.00
メキシコ人	8	3.50	2.6	4.00
モロッコ人	9	3.34	2.6	3.00
エチオピア人	10	3.27	2.6	3.00
インド人	11	3.23	2.6	3.00
エジプト人	12	3.20	2.6	3.00

Note: 平均値が7に近いほどより近い社会的距離を表す

表3 独立変数と社会的距離度数（フィリピン人に対する）の二項相関 (n=74)

	Test	二項分析	p
年齢 (14-74)	r	-0.28	*
性別 (女性)	t	0.22	N.S.
婚姻状況 (配偶者ありもしくは同棲している)	t	0.66	***
教育達成度	r	-0.53	N.S.
言語能力 (英語)	r	0.42	**
言語能力 (フィリピン語)	r	0.25	*
職業	a		
学生		Reference group	
無職・定年退職		0.18	N.S.
主婦・主夫		2.42	*
宗教家		1.90	N.S.
自営業		-0.57	N.S.
専門職		0.98	N.S.
1か月の平均支出	r	-0.35	**
フィリピンにおける滞在期間	r	-0.25	*
日本以外での総滞在期間	r	-0.30	*
ソーシャルネットワーク			
一人もしくはそれ以上の親友がいる (yes)	t	0.72	N.S.
近隣に親友がいる (yes)	t	0.11	**
日本人の親友がいる (yes)	t	1.25	N.S.
フィリピン人の親友がいる (yes)	t	5.92	N.S.
伝統的信念			
妻は夫の家の墓に入るのがよい (同意)	t	0.11	N.S.
先祖伝来の家や土地は大切に守っていくのがよい (同意)	t	0.21	N.S.
年老いた親の面倒は家族がみるのがよい (同意)	t	0.52	*
結婚せずに一人で暮らす生き方があってもよい (同意)	t	0.72	N.S.

Statistical analyses: r = Pearson correlation test; t = t-test; a = analysis of variance (ANOVA)

\*\*\*p<.001; \*\*p<.01; \*p<.05; N.S.=not significant

を意味している。また、ほとんどの回答者がフィリピン語を話せないという事実は、我々の母集団に対する次の仮説、すなわち、ボガードスによる「人々は同じエスニック・ヘリテイジを共有する集団を受容するという傾向がある」との考察に重みを与える。その後の研究で、関連する要因もさらに特定されており、出生地、社会関係、職業、宗教、ジェンダー、年齢などがそれに該当する (Parrillo&Donoghue, 2005)。

これらの研究結果は、ボガードスの最初の調査結果と一致する。というのも、2つの集団間の相違そのものが、親密さが増すにつれ、より強く認知されるからである。

さらに、これらの社会研究は、親密な関係を構築する際に、相互理解や考え、文化の交換を担う言語が重要な要素となっていることを立証している (Levine& Adelman, 1993)。本研究も同様に、英語とフィリピン語の能力の高い者がフィリピン人とより近い関係を持つことを明らかにしているが、一方で、配偶者の関係や家族関係に関する質問項目においては、社会的距離スコアが全回答者で低下しているのも事実である。このことは、特にフィリピン語の能力の欠如が、日本人移住者がフィリピン人とより深い社会的絆を結ぶのを妨げていると示唆している。明らかな傾向は、より年齢の高い回答者は認知される社会的距離が遠く、一方より若い回答者は認知される社会的距離が近い。これはアメリカ人学生に関する過去の調査結果と一致し、アメリカにおけるアジア人学生への調査結果とは一致しない (Crystol, Watanabe, Wu& Weinfurt, 1998)。

実際、回答者の多数が、学校でのイベント、プログラム活動を通じてピアとの相互作用の機会を多く持つ留学生なので、本研究においてかなり高い親密さのスコアを示していても不思議ではない。また、学生のサンプル数の多さによって、認知される近さと他の要因との相互関係についても説明ができる。つまり、より低い平均支出は学生を示す典型的特徴であり、また滞在期間も比較的短い。さらに、自主性は重要な要因である。一般的に言って、学生は自分で決断し、フィリピンへ勉強に来る。そしてあらかじめ決められた期間、例えば6か月から2年間をフィリピンで過ごす。それと比較すると、生命などによりフィリピンへ送られる会社員や政府関係者では個人的選択の度合いが低く、また、滞在期間も長期に及ぶ。自分でフィリピンから離れる選択を決定できる度合いも低い。これらは社会的距離を隔てる要因なのである。既婚の主婦もしくは主夫のサンプル集団も学生と

ともに高いスコアを示しているが、これは配偶者がフィリピン人であれば当然の結果と言える。

## 2.5.2 本研究の限界

本研究のサンプルはマニラ在住の日本人に限定されており、より正確なデータを採集するには、フィリピン全国から集めたサンプルを研究することが望まれる。例えば、アメリカ、韓国、日本といった他の国で行う調査は、様々な文脈において日本人の他国籍者に対する態度を明らかにするであろう。移住当事者のホスト社会に対する態度を評価する、さらなる研究が望まれる。社会態度と同化のパスpekティブに関し、広い知見が得られるからである。では、社会的距離研究において分析枠組みをいかに用いればよいのか。次項で俯瞰してきたい。

## 3. 社会的距離の分析枠組み再考

前節では、一例として筆者の研究を紹介した。では、今後の日本社会における外国籍住民の社会的距離研究に向け、前述の調査研究を踏まえたうえでさらにどのような分析枠組みを構築していけばよいのか。本節では、社会的距離を規定する要因に関する複数のモデル・理論について再検討する。それらは(1)社会的学習理論 (Social Learning Theory)、(2)コンフリクト理論 (Conflict Theory)、(3)同調モデル、(4)構造モデル、(5)存在脅威管理理論、(6)社会構成仮説、(7)都市度仮説、(8)接触頻度假説、(9)マージナル・マン理論 (Theory of Marginal Man) 等がある。その中でも特に、(1)(2)の理論について見ていきたい。Heydari (1988)は、彼の博士論文である“An empirical test of two conceptual models concerning American students' social distance from international students”において、彼の在籍するサウスダコタ州立大学のアメリカ人学生によって知覚される留学生への社会的距離を規定する要因に関し、社会的学習理論とコンフリクト理論を分析枠組みとして採用している。以下A. ヒーダリー (Heydari, 1988: 37-61)に依拠しつつ、社会的学習理論とコンフリクト理論を俯瞰する。

### 3.1 理論の再検討

#### 3.1.1 社会的学習理論

A. バンデューラの社会的学習理論によれば、人々は各々の文化に属しながら、周囲から受ける相互作用の影響を通じて行動、態度、価値観、習慣などを習得してい

く。この理論は、価値観や態度の習得に関し、内的動機よりも相互作用を受ける環境的要因のほうに着目している。模倣学習とは、模倣者が他者の行動をまねすることによって強化を受け成立する学習である。それに対し観察学習とは、直接的な強化を受けず、つまり当事者が自分自身で行動せず、他者の行動を観察することを通して成立させる学習である。人々は環境からの学習によって態度や価値観を習得していくわけだが、このモデルを形成する要因として、文化的気づき(cross-cultural awareness)、同調、家族・友人、ジェンダー、宗教性、出身地(都市・農村)などが重要だとされる。

まず社会的規範と同調についてであるが、集団に対して偏見が生まれる一つの要因に、文化システム規範の一面でもある偏見的態度を有する家族と社会に育てられることより、偏見が社会規範に適うものと認知・習得されてしまうことが挙げられる(Heydari, 1988)。同調的態度は、両親の態度と所属集団が有する態度を通して形成される。両親の当該民族集団に対する態度とその子供が民族集団に向ける態度には、強い相関が形成される。家族は社会化を行ううえでの「重要な他者」である。人間の初期発達段階において家族はマイクロ世界であり、またマクロ世界へと続く大切なパイプである。諸個人は、家庭や友人を通して学習した世界観に応じて、各民族集団に対する態度を決定すると想定される。そこから、社会的距離の度合いに関しても、家庭で注入された価値観に諸個人は大きく影響を受けると考えられる(Heydari, 1988)。

次に、ジェンダーについてである。ジェンダーは、文化的学習の観点において重要な要素であるとされる。両親、学校、その他の文化化エージェントによって、ジェンダー・ソーシャリゼーションが行われる。その結果、振る舞い、言語使用などにジェンダーの差が出ることは言うまでもないが、異文化に対する態度にも、ジェンダーに応じて差異が表れると想定される。ヒーダリーは、女性は男性に比べて異文化に対する社会的距離が短いと仮定しているが、この点については、のちに述べる存在脅威論における、「女性は異文化に対する脅威を男性に比べて感じやすいことから、異文化に対する寛容度が低い」という仮説と相反する。

文化的気づき(Cross-Cultural Awareness)についてである。文化的気づきとは、自分の価値観が自己の属する集団文化に規定されていることへの気づきを指す。「文化的気づきの度合い」が高いということは、自分自身の文化を相対化してとらえている度合いが高いことを

意味する。文化的気づきを有する者は、異文化の中に入ったとき、異文化を持つ他者のあり方に気づく度合いも大きくなるとされる。「文化的気づき」は異文化への寛容度を規定する要素であるが、これは学習を通して高められると考えられる。異文化体験を有する者は異文化を体験していない者と比較して自己と異なる文化的背景を持つ民族的集団に対し、より高い親密感を抱けると想定される(Heydari, 1988)。このことから、自国外滞在期間は、態度形成要因の一変数であると仮定できる。

デュルケムは『宗教生活の原初形態』において宗教を次のように定義する。「宗教とは、神聖すなわち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連体的な体系、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を統合させる信念と行事である」(デュルケム、1912=1975: 86-87)。宗教はすべての人間社会に存在するとされ、それを信じる者に対して特別な意味を与える。宗教的信念、および信じる宗教的教義や規範の違いが、諸個人の態度形成に大きくかかわってくる(Heydari, 1988)。社会的学習理論では、宗教的価値観は相互に作用する諸個人や集団を通して学習されると考えられる。ある宗教集団は、例えば「誰とつきあうべきか、そして誰とつきあうべきではないか」という極めて個人的と思われる選択に関して影響力を持つ(Heydari, 1988)。「教会への出席」「モスクへの出席」の頻度といった変数が社会的距離に影響を与えるのかということも、一つの視点となろう。ヒーダリーで引用されている各調査(Lindsey, 1950)では、各調査者によって「宗教性」と「異文化に対する態度」に関する相関の結果が異なっていた。しかしながら、やはり宗教は、「重要な他者」になり得るものを選別する一つの機能だという見解が出されている。そこから、社会的距離の規定要因として、宗教性が低いほど、異文化に対する社会的距離の度合いも近いと仮定できるかもしれない。

エスノセントリズムについて。エスノセントリズムとは「自らの人種ないし民族を美化してこれを至上のものとする反面、他人種、他民族を偏見・差別の対象とする思想や生活態度をいう」(浜島、石川、竹内、2005: 40)。エスノセントリズムの度合いが低い者は、異文化に対する社会的距離も近いと仮定される。

出身地「都市」と「農村」について。「個人の生活に関わる要因、例えば規範、異文化体験、家族、エスノセントリズム、宗教性、文化的気づきは都市と農村では、その様相が異なる」(Heydari, 1988)。そこで、エスノセントリズムの度合いは農村出身者より都市出身者のほ



うが低く、そのため、社会的距離の度合いも都市出身者のほうが農村出身者よりも低いと Heydari は仮定する。

#### コンフリクト理論から見る社会的距離

ヒーダリー (1988) に依拠し、コンフリクト理論から見る社会的距離について述べるが、コンフリクトの概念、エスニック・コンフリクト、社会経済的地位 (SES)、稀少価値などに触れる。まず、コンフリクトとは何か。「複数の社会的要素が、稀少な価値を巡って、相互に直接あるいは間接の否定的行為を加えあう状態をさす。個人間にも集団間にも、個人と集団の間にも生じ、目標とされる価値も愛情・地位・利益・権力と多様である。用いられる手段も単なる協力の拒否から、言論・奸計・腕力・武力と様々である」(浜島、石川、竹内、2005:204)。

#### 資源の希少性

資源の希少性はコンフリクトを引き起こす一要因となり得る。他集団の存在によって、自分たちの稀少な資源へのアクセスが脅かされると感じた場合、集団間の対立の可能性が高まる。収入、経済的安定性、職、住宅、ネットワークなどの資源が乏しいと感じている者は、他集団に対してより大きな隔たり、すなわち社会的距離を持つようになると考えられる (Heydari, 1988)。

#### エスニック・コンフリクト・人種コンフリクト

民族集団は「共通の出身地または別個のサブカルチャーを基本に、自分たちと部外者との区別を維持する人々の自意識の共同体」と定義される。民族集団成員は、自己の周りから受ける偏見の態度や差別的行動、すなわち頻繁に他者との違いを思い知らされる経験によって、より大きな疎外感を抱くようになるとされる。また、マジョリティ集団が社会の中における自身の優位性を実感することにより、他民族集団を支配する権利があると偏見を持つ場合もある。

#### 社会経済的地位 (SES)

コンフリクトを引き起こす要因は、他者との交流に影響を与える個々の社会経済的地位 (SES) である。ヒーダリーは、「他集団に抱く偏見の有無・その程度に、出身階級による差が生じるだろうか」という疑問を呈し、教育レベル、収入、地位、職業などで測られる社会的階級の度合いと偏見の態度の度合いは反比例すると指摘した。社会的な階級・階層の地位が高くなるほど、民族的

な固定観念に固執して異なる民族の人々との間に大きな社会的距離を置こうとする意思表示が少なくなるとされる。(Heydari, 1988)。

以上ヒーダリーの二つの分析枠組みについて俯瞰した。この分析モデルは大きな示唆を与えてくれる。2節で述べたような移住当事者のホスト社会に対する社会的距離分析にそのまま適応できるかについては、さらなる検討が必要であろう。

### 3.2 新たな分析枠組みの構想——社会的距離と逆社会的距離——

社会的距離尺度で測定できる「距離」の限界について述べる。社会的距離尺度は「道端で話しかけられる」から「結婚する」ことに抵抗を感じるかという質問項目の構成になっており、親近感を7段階で測定するものである。近年顕著になっている問題は、移住当事者がホスト社会の成員と「結婚をする」ことに抵抗を感じなかったとしても、ホスト社会からの疎外感や被差別感を持っている可能性は十分にあり、そのことについては社会的距離尺度では測定できない。例えば、ある移住者が日本人と実際に結婚していたとしても (社会的距離尺度における最も高い親密さを表す)、「日本社会から差別を受けている」「家族から軽蔑されている」「仲間外れにされている」と当事者が感じている報告は、複数存在する (ベントゥーラ、2007; David, 1991; Almonte, 2001)。そのようなマイグラントのホスト社会への知覚を計測するのに、ボガダス社会的距離尺度を補完する測定方法が必要となる。そのような尺度として逆社会的距離尺度 (Reverse Social Distance Scale) がある。

#### 逆社会的距離概念と逆社会的距離尺度の可能性

逆社会的距離尺度 (Reverse Social Distance Scale) は M. Y. リーと M. C. レイと S. G. サップによって考案された尺度である (Lee, Ray & Sapp, 1996)。マジョリティ集団 (すなわち当該社会において最大の力を持つ集団だが、規模も最大であるとは限らない) とマイノリティ集団との社会的距離は、マジョリティ集団のマイノリティ集団への反応ではなく、「マイノリティ集団によって知覚されたマジョリティ集団による拒絶または受容に対するマイノリティ集団の反応」に焦点が当てられる (Lee, Ray & Sapp, 1996)。マジョリティ集団によって確立されたマイノリティ集団に対する距離をマイノリティ集団がどのように感じているかについては、ボガダスの社会的距離尺度では測ることができない。仮に研

究が移住当事者の視点を理解することに焦点を当てているのであれば、移住当事者が感じている「ホスト社会構成員であるマジョリティ集団によって移住者との間につくられた『距離』」を調査することも重要である。逆社会的距離とは、つまり「私は相手にどのように見られているのか」「私は相手からどの程度距離を取られているのか」ということに関する知覚の度合いである。すでにホスト社会構成員と結婚している者については、当然ながらボガードスの社会的距離尺度における社会的距離の度合いが低いと予想される一方、逆社会的距離尺度においてどのような差異が存在するのかについては未知である。

#### 4. 終わりに

移住当事者に焦点を当てて社会的距離、逆社会的距離を研究する意義とは何か。それは、当事者の移住地における「状況の定義」を反映しているからである。「人が状況を現実のものだと定義する事によって、状況は現実になる」(Thomas and Thomas, 1928:572)。「人々は状況の定義によって状況を解釈し、状況に社会的な意味を付与する。このような同じ“状況の定義”は無意識に学習した結果であって、思考の産物ではない。人々は“自明の世界”を作り出しているのである。“状況の定義”は社会秩序を生み出す主観的な源泉である。相互行為は人々が状況に対して抱く信念と解釈によって、さらには人々が自己の行為および他者の行為に付与する意味によってパターン化される」(ブルーム、セルズニック & ブルーム1981:84)。

ここでの問題は「人が状況を現実のものだと定義することによって、状況は現実になる」という信念が真実であるか否かにあるのではない。重要な点は「状況の定義」によって生じた、社会的相互作用の結果にあるのである。つまりどのように移住者がホスト社会への距離を定義しているかが、現実の行動に影響を及ぼすと考えられるのである。それは「越境者——エスニシティ」と「共振者」(広田、2003)のつくり出す世界形成に影響を与えるであろう。

#### 引用文献

安達理恵、2008、「日本人の異文化受容態度にみられる傾向—一地方都市での年代別・国別態度調査より」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』35:153-173。  
Almonte, S. A., 2001, "The plight of Filipino Women in Japan: Limitations and challenges for the Philippine Educa-

tion." *Bull. Grad. School Educ. Hiroshima Univ.*, 3 (50): 159-165.  
Bogardus, E. S., 1933, "The social distance scale." *Sociology and Social Research*, 17: 265-271.  
Bogardus, E. S., 1958, "Racial distance changes in the United States during the past thirty years." *Sociology and Social Research*, 43, 127-134.  
Crystal, D. S., Watanabe, H., Wu, C., & Weinfurt, K. 1998. "Concepts of human differences: A comparison of American, Japanese, and Chinese children and adolescents." *Developmental Psychology*, 34 (4): 714-722.  
David, R., 1991, "Filipino Workers in Japan: Vulnerability and Survival." *Kasarinlan*, 6 (3): 9-23.  
デュルケム, E., 1912, *The Elementary Forms of The Religious Life*, (=1975、古野清人訳『宗教生活の原初形態<上>』岩波書店.)  
Fukuoka, Y., 1998, "'Japanese' and 'Non-Japanese': The Exclusivity in Categorizing People as Japanese." *The Hiroshima International Conference (Panel 19: ISA, RC 21)*.  
濱田国祐、2008、「外国人住民に対する日本人住民意識の変遷とその規定要因」『社会学評論』、59:(1).  
浜嶋朗、石川晃弘、竹内郁郎、2005、『社会学小辞典』有斐閣。  
ベントウラ・レイ、2007, *Into the Country of Standing Men*, (=2007、森本麻衣子訳『横浜コトブキ・フィリピーノ』現代書館)  
Heydari, A., 1988, *An empirical test of two conceptual models concerning American students' social distance from international students*. South Dakota State University.  
広田康生、2003、『エスニシティと都市』。有信堂高文社。  
堀内康史、2006、「外国人居住者弘津と外国人への寛容性—サイズのプラス効果の検証」『上智大学社会学論集』30。  
伊藤泰郎、2000、「社会意識とパーソナルネットワーク」森岡清志、『都市社会のパーソナルネットワーク』141-159。東京大学出版会。  
Ito, S., & Varona, R., 2009, "Degree of Social Distance between Japanese and Filipinos in Manila." *Asia-Pacific Social Science Review*, 9:(2), 35-48.  
岩男寿美子、1989、「日本人の対外国人態度」『ファイナンシャル・レビュー』1-11。  
Kleg, M., & Yamamoto, K., 1998, "As the world turns: Ethno-racial difference after 70 years." *Social Science Journal*, 35: 183-190.  
小池浩子、酒井英樹、2010、「接触の度合いと外国人に対する態度」『信州大学教育学研究論集』87-98。  
厚生省大臣官房統計情報部、1997、『英文 厚生統計要覧 1997』厚生統計協会。  
Lee, M. Y., Ray, M. C., & Sapp, S. G., 1996, "The reverse social distance scale." *Journal of Social Psychology*, 136:

- (1), 17-24.
- Leonard Broom, Selznick Philip & Dorothy Broom Darroch, 1978, *Sociology*, Harper and Row. (=1987、今田高俊監訳『社会学』ハーベスト社.)
- Levin, D. R., & Adelman, M. B., 1992, *Beyond Language: Cross-Cultural Communication*. Prentice Hall College Div.
- Lindzey, G., 1950, "Differences between the high and low in prejudice and their implications for a theory of prejudice." *Journal of Personality*, 19: 16-40.
- 松本康、2004、「外国人と暮らす—外国人に対する地域社会の寛容度」松本康編『東京で暮らす—都市社会構造と社会意識』東京都立大学出版会。
- 松本康、2006、「地域社会における外国人への寛容度—隣人ネットワークが媒介する居住地効果—」広田康生・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編『先端都市社会学の地平』ハーベスト社、8-32。
- 森岡清志、2000、『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会。
- 永吉希久子、2008、『排外意識に対する接触と驚異認知の効果—JGSS-203の分析から』日本版 General Social Surveys 研究論文集、7。
- 大槻茂美、2006、「外国人接触と外国人意識—JGSS-2003データによる接触仮説の再検討」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』、5。
- 王珮瑜、2009、『台湾の大学生における日本留学と社会的距離』東アジア研究、7: 123-136。
- Owen, C., Eisner, H.C., & McFaul, T., 1981, "A half-century of social distance research: national replication of the Bogardus studies. *Sociology and Social Research*" 66: 80-98.
- Parrillo, V.N., & Donoghue, C., 2005, "Updating the Bogardus social distance studies: a new national survey," *The Social Science Journal*, 42: (2), 257-271.
- 田辺俊介、2002、「外国人への排他性とパーソナルネットワーク」森岡清志編、『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会。
- Thomas, W. I., & Thomas, D. , 1928, *The Child in America: Behavior Problems and Programs*. New York.
- 伊藤史朗 ITO, Shiro フィリピン大学大学院ディリマン校社会科学哲学研究科社会学専攻博士課程在学中 (Ph.D. Candidate, Department of Sociology, College of Social Sciences and Philosophy, University of the Philippines, Diliman)